

< 断面展開図 > について

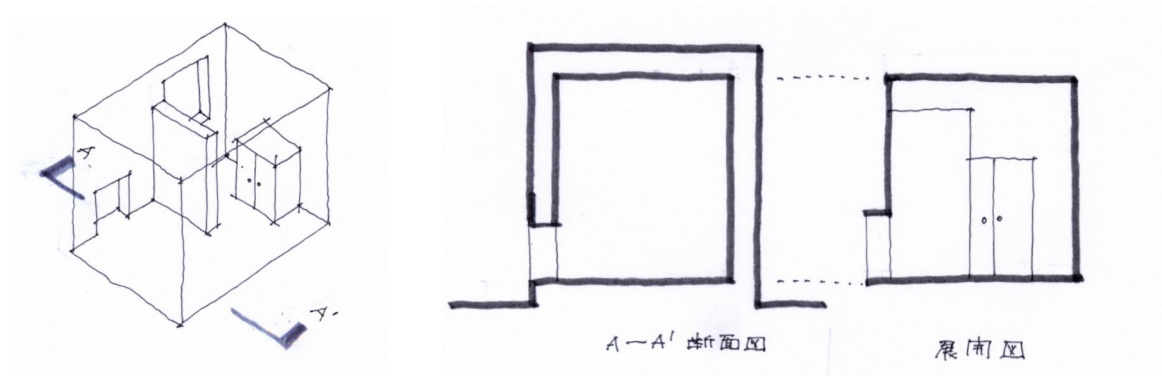
断面展開図とは、断面図と展開図を組み合わせた表現です。

断面図(平面図も同様ですが)は、建物や部屋の切断面を表現することにより、外部と内部、空間のつながりや関係性を表す手段です。

一方、展開図は、建物や室内のある方向を見たときにどのように見えるかということを表現します。それによって、その内部にあるものの関係性を表します。

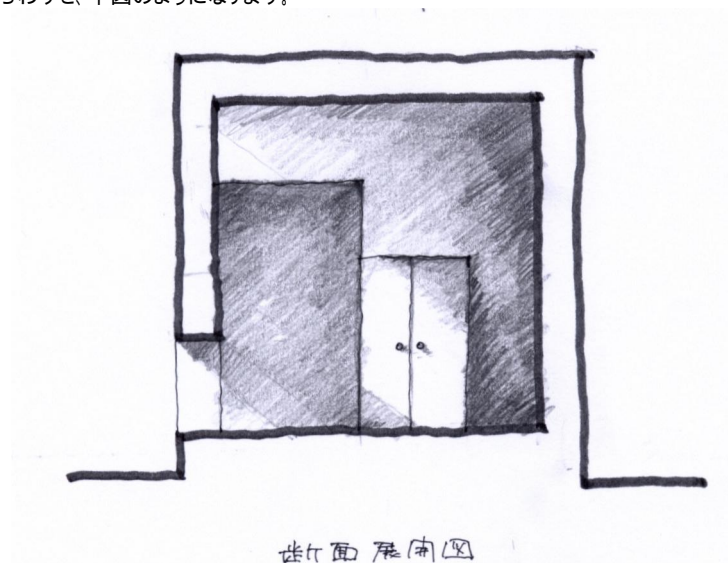
ということは、断面展開図とは、外部と内部のつながりや関係性を表現しつつ、同時にその中に見えるものがどのような関係にあるか、どのような状態にあるかを表現することになります。

例として左図のような部屋を想定してみます。これを断面図と展開図で表すと右図のようになります。



断面図では、切断面の輪郭が強調されて表現されます。(実際の作図では、手書きなら“強い線” CADなら太い線 1/50 なら 0.35 ぐらいでも OK。)一方展開図では、切断線は表現されますが、それと同時に内部の展開(内部の立面といっても良いです)が表現されます。

これを断面展開図としてあらわすと、下図のようになります。



先に記したとおり、外部と内部のつながりや関係性を表現しつつ、同時にその中に見えるものがどのような関係にあるか、どのような状態にあるかを表現することを意図しています。

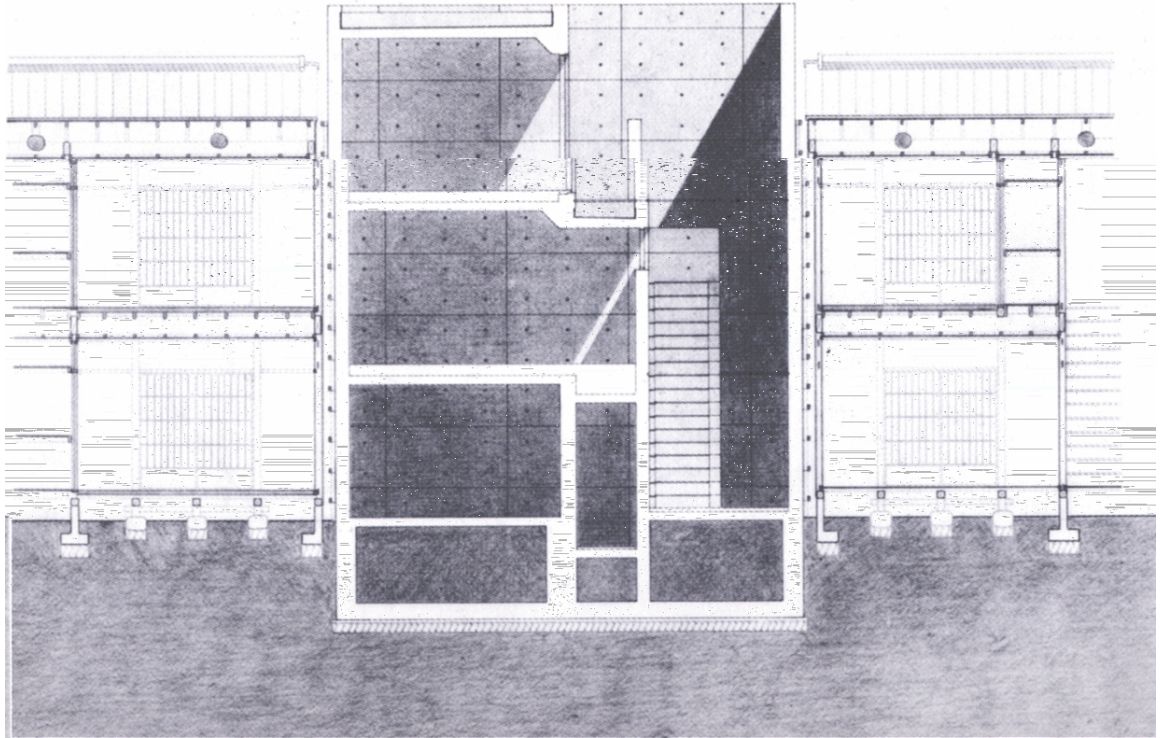
断面図や展開図では見えなかった、壁の向こう側にある高窓が光と影によって表現されているのが、わかるかと思います。

これによって部屋の奥行き感や雰囲気、壁の向こうから誰か出てきそうな感じなどが、読み取れます。

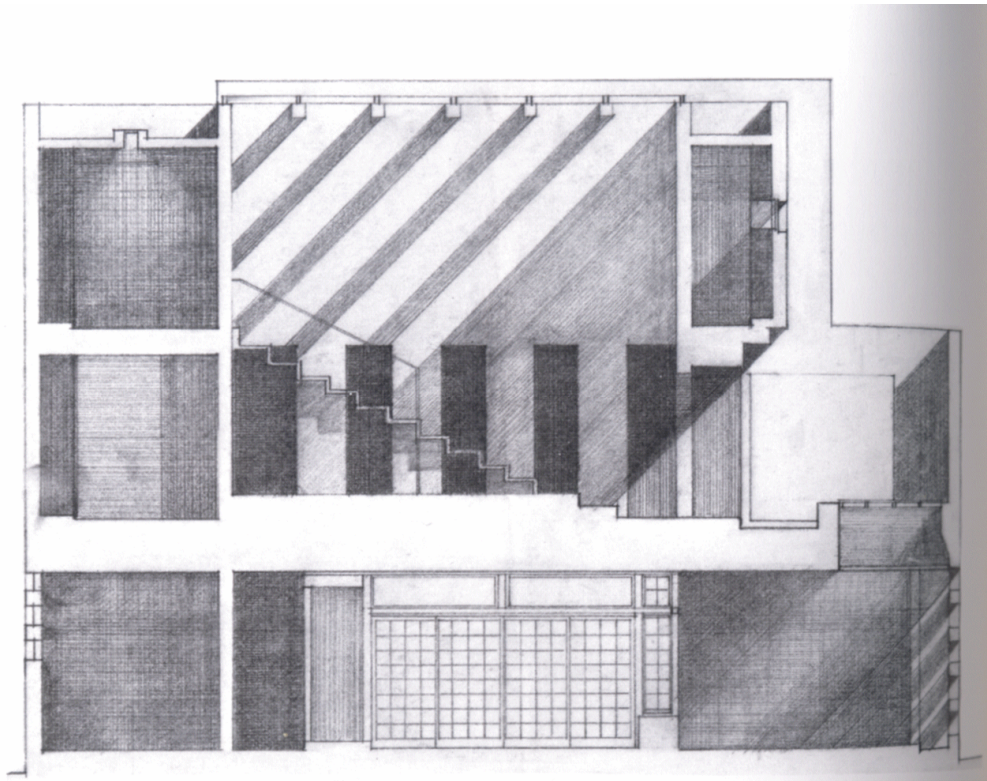
つまり、単純に見えているものだけではなく、見えていないものも含めて表現をすることができる可能性を、断面展開図は持っているといえるのではないのでしょうか？

次にいくつかの実際に建築家が描いた断面展開図のドローイングを見てみます。

安藤忠雄の「九条の町屋」です。
安藤さんのコンクリートの質感、周囲の町屋とこの建物の関係、光や風の取り入れ方、階段室でもある屋外の中庭の雰囲気が、この断面展開図から読み取れます。



室伏次郎の「千石の家」です。
同じくコンクリート打ち放しなのですが、安藤さんのコンクリートとは随分違う雰囲気を持っています。
室ごとに光の採り入れ方やそれに伴う印象がかわり、その違いを感じながら生活を営むんだということが良く伝わります。



磯崎新の武蔵丘陵カントリークラブです。

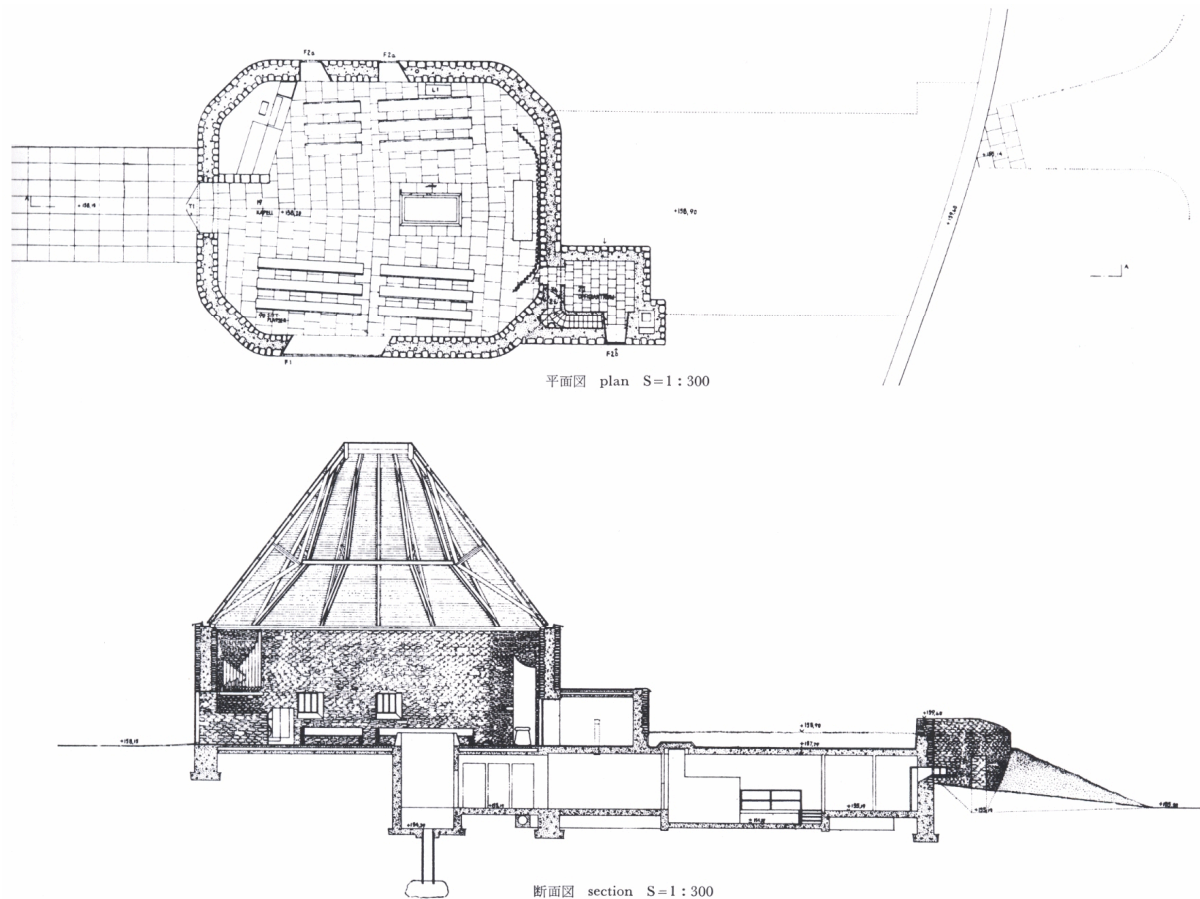
図面は水彩によって着彩され、ものの素材感と光の透明感が表現されています。

実際に出来上がった建物では、この空間を見上げることはできません。

つまり、この空間のかたちやあり方の質をもし磯崎さんがこのドローイングで表したようなものであると考えると、それは実際に目で見ることができないものであり、この着彩された断面展開図のみとおして感じられるものなのである、ともいえるかもしれません。



最後に紹介するのは、Erik Gunnar Asplund(アスブルンド)のシュヴデ火葬場です。
この作品はアスブルンドの最晩年のものであり、彼自身の死後建物は完成しましたが、実際の建物の写真よりも、この断面展開図のほうがはるかに空間のクオリティーを語っていると思います。
精緻に描きこまれた石の壁や木の軽やかな構造体から、静かで落ち着いた、それでいて重苦しいばかりではなく、希望のようなものが感じられるであろう空間の様子が目に浮かぶようです。



断面展開図の持つ表現の可能性についてさまざまな実例を挙げて説明しました。
断面展開図だけではなく、他の図面(平面図であれ立面図であれ、詳細図であれ)にも言えることですが、図面と実物とはまったく違います。図面とは抽象的なものであり、想像し、検討し、計画し...といったこと、あるいは構想した建物の思想が表現されるべきものであります。そして同時にその思想を他の人に伝えるための媒体(メディア)でもあります。
そのことを考えながら、図面を書いてほしいと思います。
(小形 徹)